

日本語と韓国語の語順

金 亨 哲

語順と言えはその見る視点によっていろいろの研究の仕方があると思いますがここではその意味に重点を置いて万葉集の巻一である八四首に限って韓国語の語順と違いがあるかどうかについて考えて見ることにします。意味が分からない歌については当然、ここでは外すことにします。また、その意味としては次の事項に注意しながら見ることにします。

1. 深く係っていく成分は浅く係っていく成分より前に来やすい
2. 広く係っていく成分は浅く係っていく成分より前に来やすい
3. 時格、場所格、主格、与格、体格、文末の順が普通の語順である
4. 長い文節は短い文節より前に来る
5. 文脈指示語を含む文節はそうでない文節より前に来る
6. 話題指示の句（～は、～も、など）は、文の先頭の方に来る
7. 場所については「～から～に（へ）」の語順が普通である
8. 内容に関する部分文、相手、述語という語順も多い

1. 意味の流れ

意味の流れにおいて基本的な語順は係り部→受け部が基本的語順である。係り部は述語の直

前までを言う。受け部は述語以降文末までを言う。言い換えれば動詞が入っている部分を係り部と見てもよさそうである。

（巻一、一）

大和の国はおしなべて我こそおれ、しきなべ

係り部

受け部

係り部

て我こそいませ

受け部

（韓国語）

YAMATONARANUNMODUNEGAITGO

係り部

受け部

MODUNEGADASURINDA

係り部

受け部

これが基本的な語順と言えるが韓国語の場合でも係り部→受け部になっているので日本語の語順とは原則的に同じであるということが言える。

（巻一、一）

我こそば告らめ 家をも名をも

（韓国語）

NANUNMALHAJA JIPDOIRUMDO

のように受け部と係り部の位置が入れ替わったものもある。これを倒置と言うがその意味においては変わりはないし、ただ強調表現として取り扱う。韓国語の場合でももちろん強調表現として取り扱われる倒置がある。それは日本語と同じように係り部と受け部の位置が入れ替わったものを言う。

2. 係り部における意味の流れ

(巻一、八十四)

秋さらば 今も見るごと 妻恋ひに

時間語

係り部

鹿鳴かむ山そ 高野原の上は

主格 位格

受け部 係り部

(韓国語)

GAULIOMYON JIGUMDOSENGAGN

時間語(係り語) 係り語

ADUSI ANERULGURIWOHESO

係り部

SASUMIUNUNSANNIDA ITAKANOHA

位格(係り部)

RANUN

上で見るように受け部の「鹿鳴かむ山そ」はその順序を変えることが難しい。係り部の「高野原の上は」は主格の前に来るのが普通であり、ここでは強調表現として倒置と見ることができる。秋さらば(時間語)→高野原の上は(位格)→鹿(主格)が基本的な語順であるといえることができる。言い換えれば深く係って行く成分は浅く係って行く成分より前に来やすいということである。韓国語に訳すと日本語と同じように時間語が先に来て位格、主格の方が基本的な語順と言える。係り部の位格はもちろん倒置と見てよいであろう。「秋さらば」は「鹿鳴かむ山そ」に係って行くからここでの季節は秋ではないと思う。「今も見るごと」があるから秋かも知れないが「今」は「昔」に対する意味として「このごろ、今の世の中」と言った意味であろう。時間語と時の位格の関係に関しては次の例を見ながら考えて見ることにする。

(巻三、三一七)

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き
駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け
見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の
光も見えず ……省略

(韓国語)

CHONJIGA GALRAJINTEBUTO……

BARABONI……ANBOINDA……省略

「天地の分れし時ゆ」を時間語と言い、「振り放け見れば」を時の位格と言うと両成分の基本的語順は時間語→時の位格のように説明することができる。これらは両方とも受け部の「見えず」にまで係って行って、そこに係り先の深淺差はない。韓国語に訳した場合でも時間語→時の位格のようになっており、両方とも「ANBOINDA」に係って行く事が分かる。

3. 格の種類

格の種類については山田孝雄氏、時枝誠記氏、三上章氏の研究などがある。山田孝雄氏は呼格、述格、主格、賓格、補格、連体格、修飾格の七格を指定している。時枝誠記氏は述語格、主語格、客語格、補語格、修飾語格(連用と連体)、対象語格、独立語格を指定している。三上章氏は主格、対格、位格、与格、奪格、具格、共格の七格を指定している。

A 主格

主格と言えば文章の中で「～は、～が」と言った形式を取るのが主格である。

(巻一、十三)

香具山は 敵傍をおしと 耳梨と 相争ひき
……省略

(韓国語)

KAGUYAMANUN UNEBIYAMARULG

YIYOPDAHESO……省略

ここでは「～は」の形を取ったものであり、文章の中で述語の表す動作の主体を受けるものが主格である。韓国語の場合でも「～NUN」「～GA」というような形を取っているものが主格である。韓国語の主格は日本語の主格と同じように状態の主体、性質の持ち主、存在の主体を表すことが多い。

B 対格

(巻一、一)

箆もよ み箆持ち ふくしもよ みぶくし持ち ……省略

(韓国語)

BAGUNIDO ARUMDAUNBAGUNIRUL
GATGO……

対格は目的格とも言う。普通は「～を」の形をしているものが多い。述語の表す動作に対して働きかけを受ける対象、作り出される対象、受け渡しされる対象、精神作用の対象などといった意味的な関係を示すものが対格である。上の例では「箆を持つ」という受け渡しされる対象になっている。韓国語では「～UL」「～RUL」という形が来て目的を表す対象になる場合が多い。

C 与格、奪格、共格

(巻一、五三)

藤原の 大宮仕へ 生れつくや 娘子がともは ともしきろかも

(巻一、五二)

省略……吉野の山は 影面の 大ぎ御門ゆ
空の果てに……省略

(巻一、十三)

香具山は 畝傍山をおしと 耳梨と 相争ひき……省略

与格は「巻一、五三」のように「大宮に仕える

ために」の「～に」がつく表現形式を与格と言う。奪格は「巻一、五二」の「大御門から」のように「～から」がつく表現形式を奪格と言う。共格は「巻一、十三」の「耳梨と」のように「～と」がつく表現形式を共格と言う。この他に「～の」がつく属格、「～で」がつく具格、原因格などがある。

4. 格の語順

格の語順については(「語順と意味」、現代語の展開、佐伯哲夫先生著)に詳しく書いてあるように「なんどきかニどこかデだれかガだれかニだれかヲ紹介する」(位格「トキ、トコロ」→主格→与格→対格)の順番が普通であると思う。万葉集の巻一では格の順番がどのように書いてあるのかを見ることにする。

(巻一、一)

省略……この岡に 菜摘ます 児 家聞かな
名告らさね……省略

(韓国語)

省略……iONDOGESO NAMULKENUN ……
省略

(巻一、八)

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかな
なひぬ 今は漕ぎ出でな

(韓国語)

NIKITATSUESO BERULTARYOGO
DALULGIDARINI……

位格(ドコカニ)～対格(ナニカラ)

(巻一、四六)

安騎の野に 宿る旅人 うちなびき いも寝
らめやも 古思ふに

(韓国語)

AKINODULE JANUN NAGUNENUN……
位格(ドコカニ)～主格(ナニカハ)

～は～が	～が～は	～を～も	～も～を	～が～を	～を～が	～を～は	～は～を
3例	6例	1例	1例	16例	2例	3例	5例

(巻一、二十)
あかねさす 紫野行き 標野行き 野守りは
見ずや 君が袖振る

(韓国語)
……DANSINI SOMERULHUNDUNUNG
OSUL

主格(ナニカガ)～対格(ナニカラ)

(巻一、五二)
省略……吉野の山は 影面の 大き御門ゆ
雲居にそ……省略

(韓国語)
YOSINOISANUN NAMJOGIKUNMUNE
SO

主格(ナニカガ)～奪格(ナニカラ)

(巻一、五二)
省略……大き御門ゆ 雲居にそ……省略
(韓国語)

KUNMUNESO HANULKAJI
奪格(ナニカラ)～着格(ドコカニ)

(巻一、十三)
香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相争ひき……
省略

(韓国語)
KAGUSANUN UNEBISANULGIYOPDA
HESO MIMINASISANGWA……省略

主格(ナニカガ)～共格(ナニト)

(巻一、五三)
藤原の 大宮仕へ 生れつくや 娘子がとも
は ともしきろかも

(韓国語)
WANGESIJUNG DULGIWIHE……
NANGJADULUN BUROPDA

修飾格(ナニナニノタメニ)～主格(なにかは)

以上のことを見た限り、万葉集の巻一では主格の前に位格が来る場合が多かった。対格の前にも位格が来る傾向があるから位格は文章の一番最初に来たほうが普通であると思う。主格の後には奪格、また奪格と性質がよく似ている与格などが来て、そのあとに対格が来るのであった。五三番の歌は変位と見ることができる。従ってここではっきり言えるのは位格→主格→与格(または奪格)→体格というような順番が今まで見て来た通りに一番安定した順番ではないかと思う。韓国語の場合でも位格が先に来てから主格、与格、対格の順番が一番望ましいことであつた。

万葉集の巻一に限って見ると、変位と見られる「～が～は」の例が「～は～が」という例より多かつた。「明日は雨が降るだろう」という表現を見れば主格は確かに「明日は」である。それでは「雨が」をどう見たらよいであろうか。「雨」は「明日」の場面の中に存在する事物というだけで、特に「明日」と「雨」のつながりはない。

「は」は主体や対象、行為、作用、状態などを特に取り立てて述べる時に用いられる。ガ文型、ハ文型の発想手順の違いは表現の中核部、強調部分の違いとして現れる。ハ文型の判断文は題目に対する解説部分、質問の回答部分に当たる「何だ、何する」の述語部分に表現意図がある。しかも題目と解説との連合は話し手の判断によって行われ、それが真か否かは話し手の

主観の責任となる。

「～が」が現場に則した個別的、具体的事実であるのに対して「～は」は「～というものは」「～について言えば」と題目として取り上げる意識がある。言い換えれば一般的事実、恒常的真理となりやすい。たとえば「こどもが手術を受ける」と言えば「うちのこども」という特定の個人を指し、個別的事実となるが「こどもは手術を受ける」になると「一般的にこどもというものは」という一般的事実、社会的習慣に変わってしまう意味になる。「～を～も」と「～も～を」は一例ずつあるがわたしは「～を～も」のほうを変位と見たい。一般的に認められている語順を見ると、時（いつ）場所（どこで）主語（だれが）補語（だれに）客語（何を）述語（どうする）の順番になる。ここで「～も」が入れるところは「～を」の前が普通であると思われるから「～を～も」を変位と見るのである。

「～は～も」の場合は「は」が「も」より先に来ると言われるがここでは例がなかった。以上大体のことを韓国語と比べながら語順を見たが違いは見当たらなかった。

参考文献

1. 「語順と意味」現代語の展開、佐伯哲夫著、和泉書院
2. 「万葉集の語順」語順と文法、佐伯哲夫著、関西大学出版・広報部
3. 「語順」日本語教育事典、日本語教育学会編、大修館書店
4. 基礎日本語辞典、森田良行著、角川書店
5. 万葉集一、日本古典文学全集、小島憲之・木下正俊・佐竹昭広、小学館
6. 万葉集注釈 巻第一 澤瀉久孝著 中央公論社

